
俺の使命は勇者アドバイザー？

砂那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺の使命は勇者アドバイザー？

【Zコード】

Z4590M

【作者名】

砂那

【あらすじ】

ゲームが生き甲斐の俺は、その日発売されたゲームの攻略本を買いい、プレイ前にその世界を堪能しようと目を通していた。世界觀を把握し、システムを覚え、いざプレイしようとしてゲームのスイッチを入れると、なぜかそのゲームの世界の中に。その世界の中で出会った少女は、まだ初期パラメーターの弱い勇者。よし、ここは俺がしつかりとアドバイスをして、世界最強の勇者にしてやるぜ！

第1話 本日、発売日

「お、出でる」

学校の帰り。

俺は帰宅途中に本屋に寄り、目当ての本を見つけた。

「ファンタジードリーム²」というRPGゲームの攻略本だ。しかも、最速攻略本ではなく、完全攻略の方。

俺はゲームが好きだが、発売日当日に購入しても完全攻略本が出るまではプレイしない。俺にとってゲームは取り敢えずやってみよう、みたいな軽い感覚で出来るものではない。ストーリーを完全に掴み、登場人物の生き立ち、性格を知り、世界観を知る。そしてその時に初めて、ゲームのスイッチを入れるのだ。

近頃の攻略本は随分厚い。

だが俺にとつては本が厚い程、落ち着いてレジに足を運ぶ事が出来ない程の興奮を覚える。まるで、大好きな作家の新刊を手に取った時のような高揚感。

そう、これはもはや攻略本ではない。

ひとつ物語である。

にやにやとしながら本屋を出て、自宅へ向かつて走った。

「ただいま」

と言ひなり階段を駆け上がり、部屋に飛び込み、部屋の扉に只今ゲーム中、の札を貼る。

こうしておけば邪魔は入らない。

最初こそ親も文句を言つていた。

だが、俺はゲームを心置きなく楽しみたいので、他の日常には一切手を抜かずに暮らしていた。勉強はもちろん、学校も無遅刻、無欠席。手伝いも欠かさなかつた。故にゲームプレイ中は好きにさせてくれるようになったのだ。

速攻で着替え、攻略本を取り出す。ゆっくりとページを捲り、まずはストーリーから目を通す。ゲームの楽しみ方は人それぞれだ。中には、余計な先入観を持たずに、ゲームの中でその世界を感じたい人もいるだろう。

けれど俺はゲームそのものだけではなく、その世界をも堪能したいのだ。主人公が登場するまでの歴史。そうやってプレイしたゲームはクリアした後も忘れる事なく、オープニングの音楽を聴くだけで鳥肌が立つ。

「ふむ。確か前回は、魔王を倒して世界が平和になった筈だが、またリーンドオン大陸を災難が襲ったのか」

前作、ファンタジードリームを思い出し、しばし追憶にふける。

主人公は、剣と魔法の達人だった。

攻撃魔法を得意とし、敵全体に大ダメージを喰らわせる魔法を使うかと思えば、勇者らしく聖剣も巧みに使う。防御力も高く、ヒットポイント、マジックポイントも高い。

まさに最強の勇者だった。

名前からして強そうだった。

リンドリヤス・ドリーン・ローランスター。

俺の名前、正義とは大違이다。

いや、俺の名前だって日本人としては悪くはないが、こうこうゲームの中の名前はすべて横文字で、格好良く見えるのだ。

そして彼は身分もいい。リーンドオン大陸の中心にある大国、ローランスター國の王位継承者。

高貴な身分の彼が、世界を滅ぼそうとしている悪に対しても正面から戦いを挑み、そして堂々と勝利した。そして許嫁の貴族の娘ではなく、共に冒険し、魔王を倒した仲間の魔術師と結婚し、王位を継いだのだ。

感動のエンディングを思い出し、期待に満ちて攻略本を読み進める。

「ふーん、今回は女が主人公なのか。前作と違つて随分弱そうだな……」

人気のイラストレーターによって描かれた今回の主人公の姿。それは前作のような、若くして威厳を身に纏つた、威風堂々としている勇者のものではない。

可愛らしい、けれど頼りない少女。

ふわふわの長い金の髪は、ふたつに分けて高い位置で括つてある。ツインテールというヤツだ。

白い肌に、青い大きな瞳。十代半ばくらいの少女だ。

「……うーん」

主人公の少女のイラストを見つめ、溜息をつく。

こういう萌え系の少女は、キレイではない。

キレイではないのだが、主人公にするのはどうだろう？完全に個人的な好みだが、こういう少女を守る最強の勇者を、主人公にしたいところだ。

「パラメーターはどうなってるんだ？ む？ 全部？？？ だぞ……」

詳しく述べ二十五頁へ、と書いてある指示に従い、その頁を開く。

「ふむ」

今回のファンタジードリームは、どうやらただのRPGではなかつたようだ。

主人公の出身、身分、そして職業などをプレイヤーが選び、育てていく。

育成の要素を含んだゲームのようだった。

なるほど、それならばいかにも強そうな勇者ではなく、この少女のような外見の方が育て甲斐がある。このか弱そうな少女を、最強の勇者に育て上げるのは実に楽しそうだ。

第2話 勇者アドバイザーの使命？

攻略本を隅々までしっかりと読み、予備知識を充分に蓄え、そしてマップすら記憶したところで、俺はようやくゲームのスイッチを入れた。

懐かしいゲームの音楽が鳴り響く。俺はしばし、前作の余韻に浸つた。

「ん？」

だが、出て来たゲーム画面を見て首を傾げる。

あなたのお名前を入力して下さい。

「俺の？ 主人公の名前じゃなくて？」

いやきっと、あなた＝主人公に違いない。そう思った俺は、画面に名前を入力した。自分で名前を決める事も出来るが、俺が入れたのは攻略本に載っていた主人公の名前だ。

「ええと、エリィーエル、と」

入力し、OKボタンを押す。だが。

「んむ？」

響き渡ったエラー音と、名前が違います、のメッセージ。

「違う？ 違うって何だ？ そんなのあるのか？」

何度も違う名前を入れてみたが、結果は同じだった。

「なんだ、これ？」

疑問に思つたが、俺ははやくゲームをしたくて仕方がなかつた。頭の中には既に、育て上げるべき勇者の姿が出来上がつていたからだ。

「うーん。まあ、オンラインゲームじゃないしな」
仕方なく俺は、自分の名前をそこにに入力してみた。

「ええと、近藤正義……つと」

名前を入れると、画面が変わつた。

よくネットとかで契約する時に出る、使用規約みたいな画面だ。

「へ？ 何だこれは。えーっと、あなたはリーンドオン大陸の平和の為に、命を懸けて戦う事を誓いますか？」

今回のゲーム制作陣は、随分とお茶目らしい。だがこれもまた、ゲームに感情移入し、楽しんで貰おうという制作側の意図だろう。

俺は、その規約に目を通した。

「ふむふむ。まあ、勇者を育ててこの大陸を救えって事みたいだな。その代わりに、この大陸にいる間は、最強な力を手にする事が出来る、か。最強の力って何だろうな。まあ、なんでもアリって事か？」頷きながら、俺はゲーム画面の中の承認します、のボタンを押した。

これからまた、俺は冒険の旅に出る。

そこには日常生活の煩わしさを、ほんの少し忘れさせてくれる空間。そり、まるで異世界だ。

俺は今、ゲームといづれの異世界にしばし没頭する。

……筈だった。

「は？」

自分の部屋で、ゲームのコントローラーを握っていた筈の俺は、何故か見知らぬ街のど真ん中にいた。

「ここ、どこですか？」

道行く人達の格好、そしてその外見から、ここが日本ではないとうはわかった。

だが。

「俺の格好も変わってるし……」

ゆつたりとした部屋着だった筈の俺は、いつのまにかファンタジーゲームに出て来ている剣士のような姿をしていた。動きやすさを重

視した軽装だが、腰に下げている長剣は相当使い込んでいるようを見る。

「……ほ」

ほどよく鍛えられた身体。

背は、自分よりもかなり高い。田縁が違う。

俺はふらふらと、視線の隅に映った噴水のよつな場所へと近寄った。そして、水面を覗き込む。

「ホントに異世界に来てどうするんだあああああああ

水面に映つた姿は、冴えない俺の姿ではなく。なんと、銀髪の美形イケメン剣士だった。

第3話 手に入れた最強のチカラ

「夢か？ これは夢なのか？」

水面を覗き込んだまま、ぶつぶつと呟く。周囲の目なんか気にしない。

だが水の中に映った銀髪の剣士は、俺の意志と同じように動く。「しかし夢にしちゃ、感覚がリアルすぎる。それに、あのゲーム画面……」

名前の入力画面や、同意を求める画面を思い出す。

友人達もあのゲームを購入し、攻略本を待っていた俺と違つて即座にプレイした筈だ。

だが、あのような奇妙な画面があつたなどと言つていた者はいなかつた。

俺は水面から目を離し、近くの木に寄り掛かつて腕を組んだ。

理由などわからない。

そして、元の世界に戻る方法もわからない。
けれど、あの時。

俺は確かに誓約したのだ。

リーンドオン大陸の平和の為に、命を懸けて戦うと。

俺は確かに冴えない男だが、誓つた言葉を取り消す程情けなくはないつもりだ。

たかがゲーム。

そう言われるかもしれないが、前作を感情移入しまくつてプレイした俺にとって、リーンドオン大陸はもう人事ではないのだ。

それに。

俺は、肩にかけた深い緑色のマントを軽く払い、風に靡かせた。
男なら誰だって、一度はヒーローになつてみたいじゃないか。

あの誓約は、俺にこの大陸にいる間は最強の力を授けてくれると
そう言つていた。

既に俺は、それを実感していた。

力が満ちているのがわかる。腰に下げる劍を、使いこなす自信
もある。

軽く掌を握り締めた。

そして。

(……へえ、これが魔力つてヤツかあ)

この感覚は、体験した者でなければわからないだろう。

無理矢理言葉にするとしたら、それは願い。

こうなればいい、こうしたいと強く願つた事が実現する。俺にとつて魔法は、そんな感覚だった。

「しつかし、これは……」

俺はもう二、三度、掌を握り締めてみる。

前作の主人公、リンドリヤス・ドリーン・ローランスターにも勝る
だろう、能力だ。

まさに、最強。

裏データで、すべての能力をMAXまで引き上げたデータでプレイ
するかのようだ。

魔王？

悪いけど、負ける気がしないぜ。

だが、俺の使命は救世主になる事ではない。この世界を救う勇者を
育て上げる事なのだ。

これ程の力を持つてこの世界に来たにも関わらず、何故、俺が勇者
ではないのか。

そこに何か、深い理由が隠されているような気がする。

俺は、ゆっくりと街の中へと視線を巡らせた。

傾きかけた夕陽に背中を押されるかのように、人々は足早に通り過ぎていく。

その表情は、明るく幸福に満ちたものではない。

何かに追われるかのように、急いで立ち去る人の群れ。

まるで、田没と共にここが別世界になつてしまふかのようだつた。

俺の頭は、先程までじっくりと読んでいた攻略本の内容を反芻していた。

前回のゲームの主人公、リンドリヤス・ドリーン・ローランスターによつて魔王は倒され、世界は平和になつた筈だつた。だが実は、魔王は敵の手先に過ぎなかつたのだ。

その敵の名は、呪竜ロンンドウ。

ファンタジードリーム2のラスボスだ。

最速ではなく、完全攻略本を読破していいた俺には、その名も姿もすっかりとわかつっていた。こういったゲームのやり方を、邪道と言つ者もいるかもしれないが、ここではそれが役に立つた。

世界はまだ、敵の存在すら知らず、ただ最近は少し物騒だという認識しかないだろう。

今のうちに勇者を探し出し、呪竜と戦える程に鍛えなければならぬい。

(……つつてもなあ。勇者つてあのオンナノ口、だろ?)

まだ少し幼さを残す、少女の姿を思い出す。

彼女は何故、勇者として選ばれたのだろう。そして、どんな生い立ちをしてきた少女なのだろうか。

第4話 酒場にてイベント発生

「まあ、ゲームで情報が集まる場所ってと、酒場だろ。ゲームの常識だよな」

さて。

俺は、町の中を見渡す。

宿屋（大抵酒場と兼用になつてゐる）、武器屋、道具屋。この三つは大きい町ならば必ずある筈だ。

それに。

俺にはわかる。

ここにはスタート地点の、ロンザの町だ。

町の配置はもちろん、隠し通路や宝箱の位置まで（取つていいのか、さすがにちょっと躊躇うが）すべて確認済だ。

（しかし、3Dゲームなんてもんじゃねえな。すっげえリアル。まあ、ある意味リアルだから当たり前だけど）

慣れた自分の町を歩くかのように、すたすたと目的地に到達する。うん、間違いない。ここが宿屋兼酒場だ。

自分の記憶力の良さに軽く感動を覚えながら、どうして勉強は覚えられないのだろうといつ、よくあるジレンマに悩まされる。まあ、いい。今は勉強など忘れてしまおう。いや、人生の勉強といつ、もつとも貴重でなかなか体験してない事をやっているんだ。俺は。

酒場つてと、少しガラの悪い場所もあるが、ここはスタート地点。いたつて健全な？酒場だ。

扉に手をかけて、ゆっくりと開く。

「きやつ

すると中から少女の悲鳴が聞こえてきた。何だ？

酒場の入り口は引き戸になつていて、ちょうどその扉に寄りかかっていたらしい少女が、俺が扉を開けたら転がり出ってきたのだった。「いつたあい……。ちょっと、いきなり何する……！」

「うわー」と転がったその少女は、なかなか可愛らしき姿をしていた。

わかりやすく言つなら、魔女っ子だ。

三角の帽子に黒いローブ。ほつきまで持つてゐる。ファンタジー ドリームにこんな格好の子、いたつけかな……。

けれど黒目がちの大きな瞳がとても可愛い。帽子の下から茶色のくるくるとした巻き毛が見える。少女は俺を見ると、少し頬を赤らめて俯く。はつきり言つて、今まで生きてきて、女の子がこんな反応を見せたのは初めてだ。軽く感動。いい男つてのは、いつもこんな反応をされてるつて訳か。「うーむ。許せん。頭の中で、顔のいいクラスメイトを二回ずつ殴り、座り込んでいる少女に手を差し伸べる。

「すまない。大丈夫かい？」

普段の俺ならば、女の子とぶつかつてしまつたら完全にじびともどろになつてしまいそうだが、今の俺はゲームの中の美形剣士。元々ゲーマーだし、入り込むのは得意だ。

白い小さな手を握り、魔女っ子少女を立ち上がらせる。

「い、いえ。あの、あたしもぼーっとしてて。ごめんなさい」

ぺこりと頭を下げ、そして俺を見上げる。

「あの。わたし、リングダつて言います。あの、あなたは冒険者、ですか？」

転がり出でてきた時の反応から察すると、多分今の少女は【猫かぶり】状態だらう。だが、れももう女という生き物は裏表がとても激しいということをよく知つてゐる。いい男（俺のことだ）の前では、少し言動が大人しくなるくらい可愛いものだらう。

「まあ、そんなもの……かな」

さりげなく腰の剣に手を触れて咳く。やべえ、格好つけすぎだ。自分で吹き出す所だつたぜ。「だったら、お願ひ！ 私たちの村を助けて！」

必死な瞳をして、少女が俺に縋り付いてきた。

「どうやらイベント発生らしい。頭の中で地図を広げる。近くにある村は……。つと、リリン村か。確かに近くに深い森があつて、凶悪なモンスターが出るんだったな。あのトラみたいなモンスター、なんだっけ。

「キングタイガーが出たのか？」

そう、キングタイガーだ。安易な名前だと思つてた。魔物の正体を言い当てたので、少女は驚いた様子だつた。

「どうして……」

「話は後だ。急いで」

少女はまだ聞きたいことがある様子だつたが、やはり村の様子が氣懸かりなのだろう。じくりと頷く。俺は少女の先に立つて歩き出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4590m/>

俺の使命は勇者アドバイザー？

2010年10月17日03時36分発行